



ふるさとの甘酸っぱい味 東浦みかんは美味しいよ



東浦みかん生産者



森田 英治さん (76歳)
東浦地区大比田にて20歳から東浦みかんの栽培を行う。平成23年に生産農家とともに「敦賀フルーツ共和国」を立ち上げ、後継者育成などに取り組んでいる。



▲色づいて食べごろを迎えた東浦みかんを収穫する森田さん。10月20日から東浦地区の各農園でみかん狩りが始まっている。

東浦みかんは酸味と甘さが調和した「ククのある味」

10月下旬、敦賀市の北東部、敦賀湾に面した東浦地区では敦賀市の特産品「東浦みかん」が収穫の時期を迎えます。

東浦みかんは阿曾、杉津、大比田、元比田などの東浦地区で栽培されている温州みかんのことで、かつて敦賀は日本海側におけるみかん栽培の北限地でした。東浦みかんは、太平洋側で育つみかんに比べて寒い場所です。10月20日から始まる観光みかん園には、甘酸っぱい東浦みかんを求めて、年間3千〜4千人が訪れます。

東浦みかんの歴史

東浦みかんの歴史は江戸時代末期にさかのぼります。敦賀市阿曾で生まれた金井源兵衛氏が、急傾斜地の多い東浦地区にはみかん作りが適していると考え、大阪から「普通みかん」の苗木を購入し、東浦の農家に配布したのが始まりとされています。その後、みかんの生産は東浦に定着し、地区の特産品となりました。昭和中期の最盛期には50畝(50万㎡)近くまで栽培されるようになりました。

しかし、その後、九州や四国、和歌山県などで、収穫期の早い早生みかんの栽培が盛んになるにつれて、東浦地区の普通みかんは徐々に面積が減少していくことになりました。



▲大比田のみかん園からの眺め。みかん園からは敦賀湾が一望でき、みかん狩りをしながら景色も楽しめる。

東浦では、昭和40年頃から普通みかんに代わって早生みかんが植えられるようになり、昭和46年(1971年)にみかん農家によって、収穫体験ができる観光みかん園が始まりました。この観光みかん園は多い時には年間約7千人が来園するほどのにぎわいとなりました。

東浦みかんの危機

最盛期には30戸以上あった観光みかん園も、後継者不足などにより、実施する農家は減少し、現在は8戸となりました。

東浦みかんを次の世代につなげていく

現在の東浦みかんの生産を担っているのは主に70歳以上の高齢者となっています。大比田で20歳からみかん栽培を続ける森田英治さん(76)は「人が足りない、後継者がいないことが一番の課題」と言います。

東浦みかんを味わいたい

みかん狩りに行こう!

10月20日から11月30日まで、東浦地区の各農園でみかん狩りを行っています。みかん狩りは、国道8号沿いに設置したテント2か所(大比田、元比田)にて受け付けています。

料金 大人 1,000円、小学生まで 700円
(みかん食べ放題、お土産のみかん付き)
※15人以上の団体はJ A敦賀美方へ要予約



東浦みかんを注文できます!

10月20日から11月30日まで、J A敦賀美方にて東浦みかんの注文を受け付けています。注文後の集荷となるため、11月下旬以降の引き渡しとなります。

料金 5kg 1,500円 10kg 3,000円 (消費税込)
※商品は発送(要送料)かJ Aでの引き渡し
※みかんがなくなり次第終了

団体予約・注文、お問い合わせは
J A敦賀美方 営農販売課 (☎ 22-2500) まで

森田さんは「日本全国どこでも田舎は存続が危ぶまれる情勢だから、このままではまずいと思いました。なにかいい方法がないかと考えたときに、昔からあるみかん園を盛り上げれば、ふるさとに人が残るのではないかと考えました。平成23年に自分と同じみかん農家の人たちと「敦賀フルーツ共和国」を立ち上げ、後継者の育成に取り組めます。森田さんらは、元々みかん畑を持っていて栽培をやっていた農家に栽培方法の指導を始めました。

東浦みかんを残していこうという動きは他にも出ています。

東浦みかんを支援する市の取り組み

市では、東浦みかんのブランド力強化と生産力拡大を目指して、苗木の新植や園地の造成に補助を実施しています。また、毎年募集する摘果・収穫作業のボランティアや農福連携サポート事業にて作業支援などを行っています。